

「史観」批判は出会えるか？

著者	山下 範久
雑誌名	Humanities Center Booklet
巻	4
ページ	17-28
発行年	2020-07-10
URL	http://doi.org/10.15083/00079403

4 「史観」批判は出会えるか？

山下 範久



山下と申します。私が編者を務めた『教養としての世界史の学び方』を作るにあたっては、全体のフレームを作るのはなかなか難しい作業でしたが、初発の動機は以前からずっと持っていたもので、今回『国書がむすぶ外交』を拝読して、

松方さんから最初にご説明があったところとかなり共通する部分があるなどあらためて思いました。

ただ実は、松方さんは先ほど端折られましたけれど、長崎で行われた読書会のレジュメを後で拝見したところ、『教養としての世界史の学び方』に「がっかりもした」と書いてあったんです（笑）。ただ、がっかりされた理由は分かるような気もしていますので、そのあたりからお話したいと思います。

「史観」批判の二つの方向

私は「歴史社会学」の研究者を名乗っています。歴史社会学とは非常に横着な学問で、歴史家の皆さんの仕事を使わせていただき、その上で何が言えるかを議論する学問です。いわば、歴史学における「メタアナリシス」のような学問です。医学の世界ではよくありますね。さまざまな研究者がそれぞ

れに葉の検証を行い、その結果をまとめてさらに検証し直す研究です。

ただ時々、歴史家の中に岡本さんや松方さんのようなスーパーマン、スーパーウーマンが現れて、歴史家としての着地点を持ちながらも俯瞰するレベルで仕事をされるので、私のような横着な学問をやっている立場としては脅威に感じています（笑）。

それはさておき、そういった立場からすると、関心があるレベルは常に「史観」になります。私には、つつく重箱はないわけです。

『国書がむすぶ外交』を拝読して感じたことは、非常に厚みのある実証史学の成果ではありますが、全体としては史観の書き換えに顔を向けた作品だということでした。

「史観」とは、先ほど岡本さんがおっしゃったとおり、「歴史認識の枠組み」であります。いま流行りの人工知能（AI）開発の場面でも「フレーム問題」¹³などによく言われますが、フレームなしの認識はあり得ません。歴史を書くときには必ず「史観」が伴う。岡本さんがおっしゃったとおりだと思います。

問題は、「史観は、現実を隠すと同時に作り出してもいる」ということだと思います。「ある史観を持つ」ということは、「ある枠組みの中で見る」ということですから、枠組みに入らないものは見えなくなります。すなわち、歴史のある部分が隠されているということです。

と同時に、ある「史観」の中でのものを見ることで、実際には事実としての点がないところにもいろんな現実を見てしまう。実際には存在しないものを頭の中で補って見てしまうのです。

Eテレの『0655』や『2355』という番組に、「そうとしかみえない」というコーナーがあります。画面に白黒ブチの猫が映っているのだけれど、黄緑色のブロックで黒いブチの部分だけを隠すと、その猫は全身が白い猫にしか見えな

13 1969年にジョン・マッカーシーとパトリック・ヘイズが提唱した人工知能（AI）の難題のこと。すなわち、「有限の情報処理能力しか持たない推論主体にとって膨大な情報を扱いきれるか」という問題提起である。松原仁『暗黙知におけるフレーム問題』『科学哲学』24（1991年）45-56頁。https://www.jstage.jst.go.jp/article/jpsj1968/24/0/24_0_45/_pdf (accessed 24 April 2020)

くなるんです。勝手に脳が白を補うんですね。そして今度は黒ブチを覆っていたカバーを外すと、逆に白黒ブチの猫にしか見えなくなる。

つまり、ある史観を通してものを見るということは、その史観の中でみんながそう信じ込んでしまう現実をつくり上げてしまうことも伴っている。「史観は、現実を隠すと同時につくってもある」と言ったのはそういうわけです。

あくまで傾向としてですが、「史観」によって隠されてしまった現実はおおむね過去に投影され、他方、「史観」によってつくり出された現実は今我々が生きているところに定位される傾向があります。

しかも、「史観」自体にも歴史があり、寿命があります。たとえば、ウェストファリア史観¹⁴は当然ながら1648年より前には存在しておらず、それが国際関係論の中で定式化されるのは20世紀に入ってから話になります。そして、ウェストファリア史観の機能の仕方、その史観の中で想像されている歴史は変わり続け、今、ウェストファリア史観が終わろうとしているという実感があります。

「史観」にとって近い過去であるほど、現実と過去との区別が曖昧になり、関係が複雑になる。私は『教養としての世界史の学び方』の前に『ウェストファリア史観を脱構築する』という別の編著も出しまして、この本も私が国際関係学の専門家と歴史学の専門家の蝶番としての役割を果たせればと思って作ったのですが、うまくいかず、おおいに紛糾しました。

なぜそのようなことになるかということ、過去に関心を持って「不可視化された現実を可視化しよう」という方向(①)で史観批判をする人たちと、現在に関心を持って「今我々が見ているこの現実、実はある史観によってつくられたものなんじゃないか、この幻想を壊そう」(②)と考える人と、二つ

14 1648年10月24日締結の三十年戦争の講和条約(ウェストファリア条約)によって、政治面では、オランダとスイスの独立が正式に認められ、また、神聖ローマ帝国内の領邦君主はその領土に関してほぼ完全な独立主権を承認された。その結果、ヨーロッパにおいて、国家の領土権、領土内の法的主権、主権国家の相互内政不可侵という国際法の原理に基づいた「主権国家体制(ウェストファリア体制)」が確立されたと考えられている。この主権国家間システムの存在を前提とした歴史観が一般的に「ウェストファリア史観」と呼ばれ、それに基づく歴史記述は今や批判の対象となっている。山下範久・安高啓朗・芝崎士編『ウェストファリア史観を脱構築する』(ナカニシヤ出版、2016年)。

のタイプの史観批判が現れるからだとは私は考えています。この2つは意外に相性が悪い。これが松方さんの書評へのリプライになっているのかわかりませんが、史観批判がこの二つの方向を持つためにねじれてしまう、ということではないかと思えます。

ねじれる史観批判

ここで非常に乱暴な言い方をすると、私は、史観批判においてempiricist(実証史家)は①、つまり、過去を指向して、隠された現実をどうやって掘り起こすかを考える、という傾向があると思うのです。そしてcriticalsは、②「今我々が見ているこの現実、実はある史観によってつくられたものなんじゃないか、この幻想を壊そう」という方向を向く傾向がある。

国際関係論でもcriticalsといわれる集団がいて、そのグループがウェストファリア史観などに熱心に取り組みたがります。私自身はどちらかというところをcriticalsだと思っているもののいささかコウモリ的な立ち位置にあって、criticals側からは中途半端と言われがちなんです。

ともあれ、「史観」に関心を持っている段階で、その社会学者は何らかの意味でcriticalsなんです。いま自分たちに見えているこの現実の外側に別の現実があるに違いない、という認識から研究を始める社会学者が「史観」に関心を持つわけですから。逆に、いやいや、ここに見えているものは実際にこう見えているのだからそのまま分析すればいいじゃないか、と持っているようなタイプの社会学者は「史観」に関心なんか持たないんです。すなわち、社会学者で「史観」に関心をもつ者は、大体②の「現実を解体する、幻想を打ち破る」方向に行く傾向を帯びるわけです。

ただ、これは私の偏見かもしれませんが、歴史学で「史観」に関心を持つ方の中で今言ったようなcriticals的な関心を持つ方は、意外に少ないのではないかという気がしています。史料に根拠を求めるゆえに、議論の着地点が「あるものはある。ここに証拠があるではないか」となるのではないか。②の方向に行かれる方は、皆無とは言いませんが非常に少ないと思

います。

となると、結果として、歴史学者は隠された現実を可視化するために史観批判を行い、社会学者はつくられた現実を解体する示唆を得るために史観批判を行う傾向があって、どちらも史観批判をやっているつもりなのだけれど、実際にはゴールが全然違う方向を向いているために話がすれ違う。「国際関係の人が史観批判をやっている」というので歴史家が駆けつけたのに、「どうもやっていることが全然違う」とがっかりされる。もしかしたらそれが松方さんの「がっかり」の原因ではないかという気がしています。

歴史家が行う史観批判①でいう史観は、ソフトなものです。「史観」とは基本的に頭でつくられたものです。他方、史実はハードなものだから、史実のほうに根拠を置こうという形で話が進む。

それに対して、史観批判②の人には史観がすごくハードに見えている。「史観」は頭の中で構成されたものであるにもかかわらず、ものすごく強固に我々を縛っている。史観批判②の人はどうしたらその外のソフトな世界に出られるかを考えている。ある史観の外側にあるオルタナティブな「可能性の世界」は、言ってみれば想像や妄想や希望や選択肢でしかないので、非常にソフトなものです。

だからソフトなものからハードなものに行こうとする歴史家と、ハードなものを批判してもっと世界をソフトにしたいと思っているクリティカルな社会学者との間で、どうしても行き違いが生じがちなのではないかと思いました。

「翻訳」という回路／鍵

とはいえ、「だからすれ違うのは必然なのだ」と言ってしまうとまるで希望がないので、もう少し先に進めないかといろいろと考えてみました。

『国書がむすぶ外交』を読んで、私も、たしかに考えていることは同じだと強く共感しました。「こんな歴史家がいたんだ！」と感動しました。

先ほど、くしくも廣野先生が国際関係学の普遍性への指向を指摘されまし

たが、私がかもも強く感じたのは、『国書がむすぶ外交』の総論には普遍性への指向がある、もつと言え、科学に対する指向を宿していることでした。

ももとも近代的な歴史学は、科学を志向しているものです。私は歴史社会学者ですが、もつと狭く言え、世界システム論者です。私の師匠は昨年8月31日に亡くなったイマニュエル・ウォーラーステイン¹⁵で、彼は「科学を追い求める歴史」という論文を書いています¹⁶。

19世紀に学問が科学として自己を正当化しなくてはいけなかつたとき、科学には二つのタイプがあつた。法則定立的な科学か、個性記述的な科学か¹⁷。これは新カント派の哲学者のヴァインデルバントなどが言つた区別です。学問は、被覆法則（covering law）を発見する方向か、あるいは個別の事実の事実に科学的真実であることの根拠を求めるのか、のどちらかを指向するようになった。

歴史学は、科学であるという自己規定のために法則定立的な科学とは逆の方向、つまり個性記述的な方向へ行きました。歴史とは一回的なものであるから一回的な歴史の個性を記述することが歴史の科学性なのだ、という方向に向かつたのです。このことが実証史家や考証史家、悪口を言え、重箱屋へと帰着する重力として働いた。したがつて、史学的な史観批判は、最終的には史観否定につながる暴力も含んでいると思います。

実は、このことも最初に岡本さんがおっしゃっていました。「自分は史観なんて持っていないという歴史家が時々いるが、それは自己欺瞞か自分のことをよく分かつていないだけだ」と。岡本さんは語り口がソフトなのでひつからず聞き流された方も多いかもかもしれませんが、かなり手厳しいことをおっしゃっている。

15 イマニュエル・ウォーラーステイン（Immanuel Wallerstein：1930年～2019年）は、アメリカの社会学者・歴史学者。巨視的な観点から世界の歴史・社会全体を単一のシステムととらえる「近代世界システム（資本主義的世界経済）」論を提唱・確立した。ウォーラーステインの議論に関して、川北稔編『知の教科書 ウォーラーステイン』（講談社、2001年）が最も有益な入門書である。

16 山下範久共訳『知の不確実性』所収（第7章、149-168頁）。

17 ここでいう「法則定立的科学」とは、物理学や経済学等のように、観察から何らかの一般化された法則を見出そうとするアプローチである。これに対して、歴史学のように、状況の個別性をできるだけその状況の個別性そのものに即して再現することに向かう科学を「個別記述的科学」と定義できる。

ただ、『国書がむすぶ外交』は、史学的な史観批判が引き付けられそうになっている、最終的に史観否定に行き着いてしまうような個性記述的な科学としての歴史の重力から脱しようとしている。むしろ、逆の方向に行こうとしているという印象を強く受けました。そして、「特殊を包摂する一般」を開く回路として、あるいはその鍵として翻訳に注目しようとしている。ここが肝ではないか。

19世紀言語はもともとヨーロッパの経験から抽象化された言葉ですからヨーロッパのことを記述するには非常に便利ですが、他のエリアに適用しようとすると途端に齟齬が出る。それなのに無理やり適用して使っている。つまり非対称性がある。

だから、そうした言葉をいったん括弧に入れ、使わないようにして、共約可能な¹⁸概念を現象自体に即した「別の言葉」で記述しなおそう。それは日本人が作る言葉だから、「偉い人々」とか、「またがって活動する人々」のように和語に近い、現象からの距離が非常に近い表現となるだろう。そのような言葉で記述し直すことで、共約可能性 (commensurability) の高い記述をつくらうとしている、というのが松方さんのやろうとされていることだと、私は理解しました。

『国書がむすぶ外交』は、「条約体制⇔朝貢体制」というダイコトミー（二分法）を、「外交官外交⇔国書外交」というダイコトミーで置き換えるのではなく、国書外交のさまざまなヴァリエーションの特殊ケースに外交官外交を位置付けるのでもなく、国書外交の背後には和語で記述された、より共約性の高い記述言語の体系みたいなものがあって、その記述言語の体系の中では、外交官外交も特殊ケースとして記述が可能であるような枠組みを提示してい

18 たとえば天動説が信じられている世界の言語体系において我々が今日「太陽」という言葉で名指す天体、我々が今日信じる地動説を前提とする世界の言語体系において「太陽」という言葉で名指す天体とは、言葉が指し示す実体のレベルでは同じものとして重なるかもしれないが、それぞれの言葉のレベルでは、それぞれの言葉が埋め込まれている言語体系のなかでの特定の意味の連鎖のなかにおかれているため必ずしも同じ内容であるとはいえない。つまり、パラダイムをまたぐと字面として同じに見える言葉の間に隔たりがあるということである。この隔たりを共約不可能性 (incommensurability) と呼ぶ。ここでは概念の埋め込まれている言語体系の文脈を軽くすることで共約不可能性を下げた記述のことを、「共約可能性の高い記述」と呼んでいる。

る。言ってみれば、ニュートン力学¹⁹が相対性理論²⁰の中に包摂されるように、あるいは相対性理論の中でも特殊相対論が一般相対論の中に包摂されるように、これまで19世紀言語で描かれていたものを特殊例として位置付けつつ、逆に包摂するような言語を新たに開発しようとしている。翻訳言語というより「メタ言語（高次言語：Metalanguage）」²¹を新たに開発しようとしている本だと受け止めました。

単に私の寡聞のゆえかかもしれませんが、歴史学の本でこういうアプローチを鮮明に打ち出される研究はそうそうないと思います。しかし『国書がむすぶ外交』という本に出会って、非常に強い感銘を受けています。

「翻訳」を通じて出会う史観批判

さらに、もし「翻訳」に注目してある種の普遍を指向することが歴史学による史観批判を①のベクトルから少し引き離すことができるのであれば、翻訳を通じて、二つの違う方向を向いた史観批判が出会う可能性はあるのではないか。そこで我とわが身を振り返ると、『教養としての世界史の学び方』で私がしたかったことは、19世紀言語が生まれた「近代」を参照せずに普遍性の多元性を考えることを可能にする前提をどうつくれるかということであり、よく考えると身のほど知らずに非常に壮大なことを考えていたのだと気付きました。

19世紀言語、たとえば“外交”という一つの19世紀言語を括弧に入れて共約可能なメタ言語をつくらうとしたら、それこそ『国書がむすぶ外交』のような分厚い実証研究がいるわけです。私は横着な学問出身なので、近代で

19 イギリスの科学者であるアイザック・ニュートン（Isaac Newton：1642年～1727年）が構築した力学体系のことで、具体的には3つの運動の法則（運動の第1法則、第2法則、第3法則）と、万有引力の法則を代表とする二体間の遠隔作用として働く力を基礎とした体系である。フリー百科事典『ウィキペディア』より引用。

20 ドイツの物理学者であるアルベルト・アインシュタイン（Albert Einstein：1879年～1955年）によって提唱された物理学理論で、特殊相対性理論（1905年）と一般相対性理論（1916年）の総称である。前者は質量とエネルギーの関係公式（ $E=mc^2$ ）で知られ、後者は時間、空間、物質を対象とする量子力学の理論的基礎となった学説である。『世界史小辞典』、386頁。

21 意味論において、ある言語について論じるために用いられる言語。とはある言語について何らかの記述をするための言語である。それだけでは具体的な利用に関する目的をもっておらず、特定のルールを加えることで具体的な応用として利用可能となる。フリー百科事典『ウィキペディア』より引用。

もっと大きな概念を括弧に入れて、理論レベルで、枠組みレベルでその普遍性の多元性を考えることを可能にするような理論レベルのメタ言語がつけられるんじゃないかと、どうやらよく考えもせず思っていたようです。ただこの狙いは壮大過ぎて、私の本ではそこまでたどり着けていなかった。

つまり、方向性としてはこの2冊は同じだけれど、『教養としての世界史の学び方』よりちゃんとできるスケールでおやりになった松方さんの仕事『国書がむすぶ外交』を見て、私は素直に「やられたな」と思ったのです。

私は松方さんが発見された「翻訳」という鍵を、『教養としての世界史の学び方』で十分には見つけられなかった。ただ、寄稿者の方々が「山下がやりたかったのはこういうことではないか」と私の意図を非常によく汲んでくださって、さまざまなかたちで書いてくださったので、全体としておぼろげながらもその意図が伝わる本にはなったと思います。それは私が編者として寄稿者の方々に救われたところです。

一つ言うと、読者の皆さんが『教養としての世界史の学び方』に対して持たれた最終的なイメージとして、隠れテーマのようなもの、より具体的にいえば、「制度」に対する注目を感じ取ったんじゃないかと思います。本書の執筆者の中には「制度」などという言葉は死んでも使わないという方もいらしたのですが、7～8割ほどの方が「制度」という概念は意外に有効かもしれないとおっしゃっていました。

どういうことかというと、人間も生物の一部ですので、ほかの生物同様、さまざまに異なる環境の中で異なるかたちで進化的に適応し変化していく。つまり、人間の社会も同様のプロセスで、環境に応じていろんな「制度」ができていくと考えるわけです。均衡点は複数あるでしょう。複数均衡が存在する時空では、同じことをしても環境によって違う「制度」ができていきます。それを歴史として記述するときに、「制度」を基礎に置いた言語系を開発することができれば、生物の進化の歴史を記述するのと似たようなことができるかもしれない。

実際、経済史の分野では「制度」に注目することである種の普遍史を書こ

うとしている人たちがいるので、今後はその人たちとももう少し連携できるのではないかとも思い始めました²²。

いずれにせよ、歴史について学問として考えることは一回的なものについての科学なので、どこかで不可視化された現実を可視化することと、構成された現実の解体が一致する場所があるはずなんです。その希望は捨てたくないと私は思っています。

歴史コミュニケーション

最後にエピローグとして、「歴史コミュニケーション」²³の問題をとりあげたいと思います。歴史のねつ造や乱用は本邦でも問題となっており、科学コミュニケーションの比喻で歴史コミュニケーションの問題に関わる機会がありましたので、そこにも何かインプリケーションがないかと調子に乗って考えてみました。

史観批判の①と②のベクトルを科学コミュニケーションになぞらえて考えると、①は「欠如モデル」に陥りやすい。啓蒙で解決できるとしてしまうんですね。「一般の人は本当の歴史をちゃんと知らないのだから、正確に教えてあげれば問題は解決できるはずだ」と多くの歴史家の方々はアプローチされるわけです。でも、それは結局あまり問題を解決しない。

22 近年、経済史学の分野では、市場経済を支える「制度」の視点から経済史の見直しが行われてきた。ここでいう「制度」とは、社会における公式のルールと非公式の規範の全体を指す。たとえば、ダグラス・セシル・ノース (Douglass Cecil North : 1920年～2015年) は、事実上の「制度」として国家による財産権の保護に注目し、また、「制度」が経済成果に結びつく過程、および制度が変化する過程などで重要な役割を持つ要素として「信念」も強調する。速水融・権本洋哉訳『西洋世界の勃興：新しい経済史の試み』(ミネルヴァ書房、1994年)；水野孝之ほか訳『ダグラス・ノース制度原論』(東洋経済新報社、2016年)。

23 後述するように、自然科学の領域では、専門知と社会との関係は、長らく社会の側の無知をいかに専門家が啓蒙(ただし知識を注入)するかが中心的な課題とされてきたが、専門知の高度化とそれに基づく政策的な意思決定の領域の拡大を背景に、専門知が政治的・社会的なリスクを伴う判断に関わる場合に、専門家と非専門家がともに参加するより民主的な手続きが重視される流れが1990年代以降急速に強まった。その基盤として、自然科学や技術の専門知と社会とのあいだで、より協働的に営まれるコミュニケーション活動が「科学コミュニケーション」である。「歴史コミュニケーション」という概念は、必ずしも一般的に通用するものではないが、近年における歴史修正主義や歴史否定主義の跋扈は、専門知の担い手たる既存の歴史学アカデミアによる正しい知識の注入型の啓蒙の限界という面があることは多くの指摘があり、非専門家とともに歴史を作っていく過程を重視する流れは様々な展開しつつあるように思われる。ここではそのような流れを一括して「歴史コミュニケーション」と呼んだ(参考文献：菅豊・北條勝貴編『パブリック・ヒストリー入門』(勉誠出版、2019年)、桃木至朗、秋田茂ほか編『市民のための世界史』(大阪大学出版会、2014年)、倉橋耕平『歴史修正主義とサブカルチャー』(青弓社、2018年))。

これは科学の現場でもよく言われていることです。やみくもに遺伝子組み換え作物を怖がったり原子力発電所を怖がったりするのは、人びとが十分な科学的知識を持っていないから、つまり科学的知識にデフィシット（欠如）がある。したがって、きちんとした知識を与えれば人びとは専門家による合理的な決定に納得するはずだ、というのが1960年代ぐらいまでの科学者の考え方でした。しかし、これがうまくいかないことは今でははっきり分かっています。科学社会学や科学政策の立案の現場において、科学を介した政策立案には一般の人びとも含めた利害関係者が意思決定に参加しないとうまくいかないというのはもはや常識です。しかし、依然として、歴史学の立場でネトウヨ的なものに接すると、欠如モデルによる対応が優先されて結果的に問題の解決にはならない、ということが起きる。

他方で、史観批判②のほうは、「今ある現実はつくられたものだ」と強調するあまり、逆にネトウヨ化しやすいんです。「反啓蒙」は、啓蒙が強過ぎて暴力であるときには妥当だったのですが、『『正しい歴史』なんか存在しない』、「歴史はどのようにでも解釈できる」といった話に流れてしまうと、ポストトウルース的、フェイクニュース的な歴史に陥りやすい。いずれせよ、ここでもやはり史観批判の①と②は逆の方向を向いて走り去ってしまうかたちになる。

でも実際には、史観批判に外部の視点などないのです。史観批判をしているどんな歴史家も、ある史観の中でのものを考えている。完全に史観の外部に出ることはできません。社会科学は全部そうですよね。完全に社会の外に立ってその社会を観察することはできないわけです。できると称して何らかの立場を占めるためには、方法論的に非常にアクロバチックなことをしなくてはいけなくなる。でもそうしたとして、原理的には外部の視点はないと考えざるを得ない。ですから、基本的前提として、史観批判は内部観察として行わなくてはいけないということを踏まえる必要があると思います。

もし内部観察として史観批判をするしかないのであれば、史観を批判することと史観を構築することは連続しているということになる。しかも、歴

史を書く者と歴史に書かれる者との間も連続している部分があります。そうすると、連続した史観批判、史観構築の過程に参加するさまざまなエージェントはどんどん増殖していくことになり、その増殖したエージェントをフォローしていくことを通じてでないと、今問題になっている歴史コミュニケーションの問題には十分に立ち入っていけない。

非常に難しい課題になってしまうのですが、「超越的な外部の視点に立って史観批判をすることもできる」という前提はかなり強固に最初の段階で諦めておかないと、①だろうが②だろうが、結果的に史観批判によって歴史コミュニケーションをどうにかしようとする試みは失敗するんじゃないかと思えます。

最後の話は今日の主題から若干離れましたが、せっかくの機会ですので考えたことをシェアしたうえでご批判を乞おうと思い、お話しさせていただきました。